

七〇年代児童文学の諸相

藤田 のぼる

1

前回の冒頭にも書いたが、この連載は、ある意味機械的に、前回の六〇年代に続いて今回が七〇年代、そして次回が八〇年代というふうに区切っているわけだが、「文学史」ということであれば、当然歴史文脈的な「時代区分」ということが問題になる。これについては、次回に少し詳しく述べたいが、僕としては、すでに五十年余に及ぶ現代児童文学を、大きく三つの時期に分けて考えている。第一期は

一九六〇年前後のスタートから七〇年代末あたりまで、第二期がそこから二〇〇〇年代の後半あたりまで、そしてそこから第三期が始まっているというイメージである。つまり、第三期の始まりというのはかなり近年のことなわけで、まだ確たる見解とは言い難い面もあるが、この時代区分は、連載の第一回目を書いた「現代児童文学史」が求められた時期ということも概ね呼応している。今回考察する七〇

年代というのは、今述べた「第一期」の後期ということになり、六〇年代、即ち第一期の前期（出発期）の児童文学を、早くも見直し、塗り替えていこうとした時期であり、そうした強いモチーフがエネルギーとなって、日本の児童文学の幅を大きく広げていった時期というふうに、まずはいえるのではないかと思う。

さて、前回にも少しふれたが、六〇年代の後半から末にいたって、現代児童文学の出版を担った世代（これを「出発世代」と名づけた）のひとつ上の世代、前川康男の『魔神の海』（講談社、六九）や大石真の『教室一〇五号』（実業之日本社、六九）など、子どもという存在を未来に向けて〈希望〉のシンボルとして捉えるという、出発期の作品が色濃く持っていた雰囲気とは一線を画す作品がすでに書かれていた。こうした中で、出発世代の中でまずそうした〈捉え直し〉的モチーフを顕在化させたのが、砂田弘だっ